



公益財団法人 京都新聞社会福祉事業団 活動パンフレット



2026年7月



京都新聞社会福祉事業団の活動

京都新聞社会福祉事業団は、1965年（昭和40年）、京都府・滋賀県における地域福祉の発展に寄与することを目的として、京都新聞社が取り組んできた社会福祉事業を統合し、財団法人として発足しました。

皆さまからお寄せいただいた温かいご寄付は、当事業団の福祉活動を通じて、京都府・滋賀県の地域福祉を支える大きな力となっております。

さまざまな事情により学費の捻出が困難な生徒・学生を支援する「愛の奨学金事業」、障害のある方の自立や社会参加を応援する「障害のある人のための事業」、高齢者の生きがいづくりを支援する「高齢者のための事業」、子どもたちの健やかな成長と明るい未来を支える「子どもたちのための事業」、子育てに悩む母親を支援する「子育て応援事業」、福祉団体・施設などの活動を支援する「福祉活動支援事業」など、地域に根ざした幅広い福祉活動に大切に活用させていただいております。

皆さまのご厚意を心より感謝申し上げますとともに、今後も「ともに生きる」社会の実現を目指し、より一層、地域福祉の充実に努めてまいります。

1

奨学金

2～3頁

2

障害者

4～9頁

3

高齢者

10～11頁

4

子ども

12～13頁

5

子育て

14～15頁

6

福祉活動
支援

16～17頁

7

顕彰

18～19頁



◆京都新聞愛の奨学金（贈呈式7月）.....2～3頁

京都、滋賀に在住する高校生、大学生、専門学校生らを対象に、返済不要の奨学金を支給しています。本事業は、家庭の経済事情などにより学費の捻出が困難な生徒・学生を支援するために、当事業団の発足以来、62年にわたり継続しているものです。

●奨学金は、以下の4つの部門で支給しています。

①一般の部（公募） ②交通遺児の部（公募）

③定時制・通信制高校生の部（公立高校から推薦）

④児童養護施設の高校生への奨学激励金

●支給額は、高校生一人あたり年額9万円、大学生・専門学校生には年額18万円を支給。児童養護施設（京都・滋賀の17施設）に在籍する高校生には奨学激励金として3万円を支給しています。

●2026年度の支給実績

①一般の部：172人（計2,358万円） ②交通遺児の部：10人（計135万円）

③定時制・通信制高校生の部：11人（計81万円）

④児童養護施設の高校生への奨学激励金：140人（計420万円）

合計331人に対し、総額2,994万円を支給しました。

児童養護施設の高校生への奨学激励金（2026年7月27日付 京都新聞朝刊）



がんばる高校生に奨学激励金

児童養護施設の140人に420万円

京都府と滋賀県にある児童養護施設で暮らす高校生を対象にした京都新聞社会福祉事業団の「奨学激励金」贈呈式が18日、京都市中京区のハートピア京都で行われた。代表生徒が施設長らとともに出席し、同事業団の白石真古人常務理事から受け取った一写真。

激励金は、市民や企業、団体などからの「児童養護施設・乳幼児等の子ど

もたちのための寄付」を原資に、1人3万円を贈っている。「愛の奨学金」他部門受給者と申請者のいない施設を除く140人に総額420万円が贈られた。

白石常務理事は、児童養護施設の子どもたちを応援する各種事業を支援している寄付者の皆さんについて紹介し、これら寄付金には「夢に向かってがんばる皆さんを応援



したいという多くの方々の願いが込められています」と伝えた。

代表生徒と出席した施設長の1人は「寄付に込められた思いを、施設に帰ってからみんなに伝えて共有したい」と語った。

2026年度 京都新聞 愛の奨学金 贈呈式

(2026年7月27日付 京都新聞朝刊)



代表生徒に奨学金を手渡す
白石真古人常務理事

京都新聞社会福祉事業団の2026年度「京都新聞愛の奨学金」贈呈式が18日、京都市中京区のハートピア京都で行われた。奨学金を贈る立場と選んだ委員、受け取る学生のいずれも形式の枠を超えて心を込めたスピーチが続いた。書簡が循環して次の世代、未来へバトンを受け継いでいくという願いや理念が、色濃くにじんだ。

(秋元太一)

ともに生きる

書・秋田柏樹

◆「京都新聞愛の奨学金」贈呈式◆



謝辞を述べた松崎悦愛さん
(18日、京都市中京区)

冒頭のあいさつで京都新聞社会福祉事業団の白石真古人常務理事は、奨学金がさまざまな人たちに支えられていることを寄附者からのメッセージ文を読み上げた後、ひと呼吸をおいた。「大変うれしいうえにありがとうございます」と、ある奨学生から受け取った便りにつ



謝辞を述べた野田巧翔さん
(18日、京都市中京区)

いて時間を割いて語った。美術大で日本画を学ぶ大学時代に進んだ女性が初めて個展を開くことを伝える内容だったという。個展を訪ねた白石常務理事は、女性から「支える側にまわりたい」と告げられる。同事業団のチャリティ・美術作品展に、女性作品を寄贈した。「支援を受けて成長された方が、支援する側として参加していただく。書簡が次の世代へと受け継がれていく象徴だと感じています」。白石常務理事の口からは感激が溢れた。

選考委員長からの祝辞で、横江美佐子・京都市南青少年活動センター所長は、世界の平和が揺らぎ国内で物価高騰が続く厳しい経済状況下でこそ「声を上げ、思いを伝えることの大切さ」に言及した。「つらい時に助けを求めることは負けることではありません。新たなつながりのチャンスです。一人ひとりを大切に作る社会につながります」と呼びかけた。

2回に分けての贈呈式で、奨学生代表はそれぞれ1人ずつ謝辞を述べた。

まず1部では、過疎化に伴う医療従事者不足が課題となっている京都府北部地域で生まれ育ち、京都府立医科大学の看護学科で学ぶ松崎悦愛さんが、

支援を受けた人が支える側へ 巡る善意、社会に還元

京滋の学生331人に総額2994万円

崎悦愛さんが「将来は助産師として地域医療に貢献したい」と夢を語った。実家を離れて1人で暮らし、学生生活を送るうえで学費、生活費、教科書など多くの費用が必要となる。奨学金は「経済的な支えだけでなく、応援して下さる方々がいることは大きな励みになります」といい、「地域医療に貢献することで、恩を社会へ還元したい」との思いを力強い口ぶりで述べた。

2部では、フィンランドへ留学した京都産業大外国語学部野田巧翔さんが「異なる文化や考え方に触れ、自分自身の視野を広げることができました」と、日本の魅力を世界に発信する観光の仕事に携わりたいという思いが強くなったと語った。大学1年からアルバイトとして勤務してきたユニバーサル・スタジオ・ジャパンに入社が決まり、「多くの方からいただいた親切や支えの恩返しとして、日本を訪れる方々を支える立場になりたい」と話した。

京都新聞社会福祉事業団が発足した1965年以来続いている「愛の奨学金」は20年度、京都府・滋賀県の学生331人に総額2994万円が贈られた(児童養護施設高校生への奨学金含む)。

内訳は、公募による「一般の部」は、高校生2人、大学生・専門学校生90人、交通通達見の部は高校生5人、大学生・専門学校生5人、公立高校から推薦を受けた「定時制・通信制高校生」の部9人だった。



◆障害のある人のための事業

障害のある方々が社会の一員として自立し、豊かな生活を送るためには、就労支援や文化・スポーツ活動の機会を広げることが重要です。当事業団では、障害のある人の社会参加を促進し、生活の質の向上を図るため、就労支援、体験活動、スポーツ、芸術文化など多岐にわたる事業を展開しています。

◇助成事業

「京都新聞夏季キャンプ・レク活動を応援」助成（6～9月）

障害者団体や支援グループなどが実施する宿泊を伴う、夏季のレクリエーション活動を助成

◇催 事

「京都手話フェスティバル」（2月） 5頁

手話の普及と発展を目的に、手話スピーチコンテストや手話アトラクションを実施

シンポジウム「障害のある人の就労支援」（2月） 6頁

障害のある人の就労支援について考えるシンポジウム

「みんなで海釣り-障害のある人の体験講座」 7頁

（9月／1泊2日・宮津市 京都府立海洋高等学校 桟橋）

障害のある人の余暇活動の支援をする1泊2日の海釣り体験講座を実施

「京都新聞おでかけ公演・障害者団体」（3月で2カ所） 11頁

障害者施設に演奏家らを派遣する出張型公演事業 障害者施設と高齢者施設で開催

◇障害者スポーツ事業 障害のある方々が参加できる多彩なスポーツ事業に取り組んでいます

全京都障害者総合スポーツ大会（6～10月／京都府内各地） 8頁

7競技（卓球バレー・卓球・水泳・陸上競技・アーチェリー・フライングディスク・ボッチャ）を実施

天皇杯 全国車いす駅伝競走大会（3月／国立京都国際会館前-たけびしスタジアム京都）

全国の車いすアスリートが集結する全国規模の駅伝大会

京都ゆとりスポーツの集い（10月／京都市障害者スポーツセンター） 9頁

京都府内の精神科病院やクリニックの患者同士がバドミントン、モルック、スクエアボッチャ、卓球を通じて、交流を図る大会

パラアーティスティックスイミングフェスティバル 9頁

（10月／京都市障害者スポーツセンター）

障害の有無に関わらず、ともにASを通じて交流し、技術の向上を目指す大会 など

京都手話フェスティバル

(2026年3月22日付 京都新聞朝刊)

手話 感情豊かに

中京でフェス 交流のエピソード披露

手話の普及と発展を
図る「第21回京都手話
フェスティバル」が21
日、京都市中京区のハ
ートピア京都で開かれ
た。出場者は手話を学
ぶ中で感じた喜びや、
周囲との交流のエピソ
ードを表情豊かに手話
で披露した。

2月8日に予定され
ていたが、大雪の影響
で延期となっていた。

府聴覚障害者協会と京
都新聞社会福祉事業団
が主催。一般の部には
高校生以上の9組12
人、子どもの部には13
人が出場した。

タクシー会社勤務の
井上蓮紀さんは、東京
都の会社で働いていた
時、スマホアプリを活
用してろう者のタクシ
ードライバーが活躍し
ていたエピソードを語
り、「観光の中心地で
ある京都でも実現した
い。世界から訪れるろ
う者の希望になる」と
訴えた。

最優秀賞には、手話
でコミュニケーション

を取ってプレーする
「デフバスケット」に挑
戦した経験を生徒たち
の皆さん。

最優秀賞 西村知紗
優秀賞 島田侑璃奈
都新聞社会福祉事業団賞
中上元幸▽敢闘賞 高
岡やよい



最優秀賞を受賞した西村さん(左)＝京都市中京区・ハートピア京都

シンポジウム障害のある人の就労支援

(2026年2月23日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

著・秋道和樹

◆障害のある人の就労支援シンポ◆

シンポジウム「障害のある人の就労支援」が15日、京都市中京区のハートピア京都で開催された。地域が連携して事業所の成長につながる道筋を、幅広い層の人たちが探った。就労希望者とのマッチングや柔軟な雇用面で、地域に根ざした中小企業の果たす役割が浮きひ上がった。

共生社会の実現をめざして京都新聞社会福祉事業団が主催し、16回目を迎えた。2人による講演とグループ交流会に分けて行われた。

「安心して働き続けられるための環境づくり」職場定着向上への実践」とテーマに、産業廃棄物の収集・運搬やペットボトルの再資源化などに取り組む「クリーンスペース」代表取締役の橋本味永子さんが講演した。



①「障害のある人の就労支援」をテーマに催されたシンポジウム（京都市中京区、ハートピア京都）
②聞き手からの質問に答える橋本味永子さん（右）と芳賀久和さん



個性を生かせる働き方 地域の中小企業で可能

保育士だった橋本さんは、産業廃棄物収集運搬事業の会社として設立された同社で2006年から障害者の雇用を始め、22年にはグループホームも始めた。

従業員12人のうち9人に障害があり、職場で一見とまどうような不思議な行動について「その人なりの理由やこだわりがある」と異例を示した上で個性や特性を仕事につなげていることを説明した。同社で働く4人も登壇し、ブ

レシ機でペットボトルを圧縮する作業やグループホームでの生活について喜び、やりがい、失敗体験を語った。

橋本さんは「互いに認め合える仲間の存在が、安心して働く力になる」と述べた。

続いて京都市中企業家同友会理事の芳賀久和さんは、希望者と職場の橋渡しとなっている就労支援組織「COCOネット」について紹介した。

互いに認め合える仲間が力に

中小企業の経営者や就労支援関係者のほか行政、大学関係者ら講演の聞き手約80人がグループに分れた交流会は、就労継続支援事業所「あむらた」の白濱智美施設長が司会進行を務めた。オーダーメイドの支援やグループホームの役割、時間や日数など異なる柔軟な働き方などについて活発に意見を交わした。

障害者雇用を始めたきっかけ、職場にとつてのメリットとデメリット、今後の課題など各グループから上がった質問に対し、橋本さんと芳賀さんはそれぞれマイクを握って答えた。2人のいいねいな口ぶりからは「地域が連携して就労の輪を広げよう」との共感がにじんでいた。

（秋元太一）

双子の息子が知的障害の自閉症という立場をまず伝えた芳賀さんは、同友会のインクルージョン委員会で「幸せに暮らせる地域づくりを支援する経営者集団」をめざしている、と述べた。

企業や福祉、医療、行政など35機関が参画するCOCOネットの役割として「地域の中で互いの顔が見えるネットワークを通して、誰もが個性を生かせる就労の輪を広げていく」と述べた。木下や印刷会社、リサイクルショップなどでの実習について、大規模な組織ではなく中小の企業ではオーダーメイドに近いマッチングができることを説明した。

「地域の中小企業はがんばっています」と、芳賀さんは結んだ。

みんなで海釣り-障害のある人の体験講座

(2025年9月29日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・秋道柏樹

◆ みんなで海釣り
— 障害のある人の体験講座 — ◆

主な協力団体は次の通り。
【後援】京都市、京都市社会福祉協議会、KBS京都
【協力】日本釣振興会近畿地区支部・京都府支部、全日本釣り団体協議会、京都府釣り連合会、MFG、GFG、京都府産業振興組合、訪問看護ステーションふたふたあひだ
【協賛】アサヒフーズ、がまかつ、東レ・モノフィラメント、ハヤブサ、マルキユー、マルコ



雨の中で車いす参加者もチャレンジ。カマスを釣り上げた

「みんなで海釣り-障害のある人の体験講座」(主催・京都新聞社会福祉事業団、神戸新聞厚生事業団)が13、14の両日、宮津市で開催された。京都、滋賀、兵庫の3府県から介助者を含め56人が参加、ボランティアら14人も加わり、府立海洋高校構内で多種類の魚を釣り上げた。同講座は自然の中で伸び伸びと野外活動を楽しんでもらおうと1998年から開かれていた。

13日は、同市の府立青少年海洋センター・マリントピアで開講式があり、府立海洋高校生が講座の〇の不思議を開き、実習などを通じて学んだ岩ガキ、海ごみ、ナマコの3テーマで話した。岩ガキは、実際に経験した採集器を使った作業や市場に「上場」するまでの流れなどを発表した。海ごみでは荒

海スチロールやマイクロプラスチックが海洋と生物に与える悪影響を指摘。ナマコは生態や生物的特徴、食品としての歴史を紹介した。夜には釣りインストラクターの約り講習があり、魚の釣り方や危険な魚の見分け方、救命用具のつけ方などを学び、本番に備えた。

14日朝には海洋高に移動し、雨の降る中で約50人の海洋高生・教職員に加えボランティアらが約り道具や仕掛けの準備を整え、参加者は、雨具の上や下にそれぞれ救命胴衣をつけて桟橋で手を並べた。

約果は例年より良く、午前9時の約り開始時から比較的大きなキジハタやガシラ、チヌなどが次々と釣り上がり、桟橋のあちこちで歓声が上がった。

海洋高生と京都府釣り連合会会員らは、参加者の様子や上がる魚の種類、目を配りながら、餌をつけたら、魚を網ですくって針をはずすなど介助に取り組んだ。電動車いすに乗り雨具をすっぽりかぶって挑戦していた京都市伏見区の土井孝浩さん(40)は、何回も参加して慣れた様子。「この程度の雨は気にならない。釣りはやっぱり楽しい」とカマスを釣り上げた。山科区から参加の西村幸さん(24)・ちとせさん(62)親子は、ボランティアの手助けで大きなアコウを釣り上げ、重さの部で表彰も。「アジも20匹以上釣れ、釣れた時のわくわく感や手応えがおもしろい」と話した。

京都府釣り連合会の滝近公次郎会長(58)は「今年はアジやカマスの釣れ具合がよかった。アコウやキジハタも形のよいものが上がった」と全体の釣果を評価していた。表彰式では獲物の計量と採寸結果に従って上位入賞者に釣りさおなどの賞品が贈られた。

雨の桟橋、170人が交流 海洋高生ら熱心に介助



親子で協力して楽しい約り。形のいいキジハタも上がった(写真はいずれも14日、宮津市)

全京都障害者総合スポーツ大会

(2026年7月14日付 京都新聞朝刊)

第46回全京都障害者総合スポーツ大会の総合開会式が6月21日、京都市北区の島津アリーナ京都で行われ、卓球バレー大会で開幕した一写真。

大会は、障害のある人たちがスポーツを通じて健康と体力の維持増進を図ることを目的に、京都障害者スポーツ振興会、京都府、京都市、京都新聞社会福祉事業団など9団体が主催している。同大会は、10月11日の陸上大会まで、卓球、ボッチャ、水泳、アーチェリー、フライングディスクの計7競技が府内各地で順次開催される。

総合開会式では、西陣工房Bチームの堀田優大さんが「最後の一球まで全力プレーする」と力強い選手宣

卓球バレー、白熱ラリー
全京都障害者スポーツ大会開幕

だより 事業団



誓を行った。

卓球バレー大会には、一般、学校、施設の3部門を合わせて31チームから約250人が参加し、1チーム6人がコートを挟んで音の鳴るボールを転がし合う白熱したラリーが展開されていた。

各部の優勝は次の通り。

一般の部＝西陣工房A（北区）、学校の部＝地域協働東山（東山区）、施設の部＝西陣工房C（北区）



京都ゆとりスポーツの集い

(2025年10月21日付 京都新聞朝刊)

心の病を抱えている人たちがスポーツを通じて交流する「京都ゆとりスポーツの集い」が10日、京都市左京区の市障害者スポーツセンターで行われ、約120人が参加した＝写真。

精神科の病院やデイケアに通院、通所している人の健康増進や社会参加促進を願い、府内の精神科病院やクリニックでつくる実行委員会と京都新聞社会福祉事業団が共催し、45回目。

昨年まではソフトボール大会を行っていたが、参加者のニーズに応じようと今年から内容を変え、バドミントン、卓球、モルック、スクエアポッチャの4種目の競技を行った。各競技では、好プレーに歓声や拍手が沸き上がっていた。

事業団
だより

4種目で交流沸く

「京都ゆとりスポーツの集い」



今回は7施設が参加し、選手たちは試合を通して交流を深めた。

実行委員会事務局を務めた京都民医連あすかい病院の福田寛さんは「参加者のニーズに応じて今年から競技内容を変えたが、多くの人に参加してもらえてうれしい。患者さん同士が交流する機会となっているので今後も続けていきたい」と話していた。

パラアーティスティックスイミング フェスティバル

(2025年10月13日付 京都新聞朝刊)

技術向上、交流熱心に

パラASフェス、8都府県から110人

事業団
だより

障害のある人となない人がともに演技する「第33回パラアーティスティックスイミングフェスティバル」が5日、京都市左京区の市障害者スポーツセンターで行われた＝写真。

フェスティバルは日本パラアーティスティックスイミング協会などが主催し、交流と技術向上を目的に開いている。

今回は京都をはじめ、宮城や東京、石川、愛知、兵庫など8都府県から8歳～80代の計約110人が参加し、13団体がソロやデュエット、チームなど5種目に分かれ28演技を行った。

チームの部では、障害のある人となない人が音楽に合わせて足を水面から垂直に上げる動作や、列や輪になるなど、



さまざまな隊形を演じた。

参加者は日頃の練習の成果を発揮し、華麗な演技を披露した。観覧席からは演技が終わるごとに拍手が送られた。

印象深かった演技に贈られるナイスパフォーマンス賞には、ソロの部で辻本千紘さん（京都府）、デュエットの部で三島知香さん・池谷雅江さん（同）、チームIの部でスマイリーサン（東京都）が選ばれた。



◆高齢者のための事業

少子高齢化が進む中、高齢者が安心して暮らせる社会の実現に向けた支援が求められています。当事業団では、高齢者の生活を支えるため、外出機会の創出、介護用車椅子の贈呈、在宅福祉支援など、さまざまな事業を行っています。

◇助成事業

在宅高齢者福祉サービス支援「ホームヘルプサービス活動に関する備品助成」… 10頁
(12月)

在宅高齢者へのホームヘルプサービスを行う非営利団体に対し、福祉・介護用品の購入費を助成

「高齢者へのプレゼント」贈呈(2月) …… 11頁

特別養護老人ホームへ介助用車いすを贈呈

◇催 事

「京都新聞おでかけ公演・高齢者団体」(3月で2カ所) …… 11頁

高齢者施設に演奏家らを派遣する出張型公演事業 高齢者施設と障害者施設で開催

ホームヘルプサービス活動に関する備品助成 (2026年1月19日付 京都新聞朝刊)

京都新聞社会福祉事業団はこのほど、高齢者の在宅福祉サービスを行う非営利の団体や事業所を対象にした「ホームヘルプサービス活動に関する備品助成」で19団体(京都市1、京都府14、滋賀県4)に総額137万7503円を贈呈した。

同事業は、在宅高齢者への福祉サービスの充実を目的に、介護用品や福祉用具などの購入費を10万円を上限に助成している。助成金は、移乗シートや非接触型体温計、血圧計、使い捨て手袋などに充てられる。

助成先は次のとおり。

H O P E 300字治癒の家事業所(京都市伏見区)、福知山市社会福祉協議会訪問介護事業所(福知山市)、綾部市社会福祉協議会訪問介護事業所(綾部市)、亀岡市社会福祉協議会

在宅介護の質向上へ
19団体に助成金贈呈

事業団
だより

ホームヘルプセンター(亀岡市)、長岡京市社会福祉協議会きりしま苑(長岡京市)、鶴々、京丹後市社会福祉協議会久美浜支所(以上、京丹後市)、南丹市社会福祉協議会ほほえみ八木訪問介護事業所、南丹市社会福祉協議会ほほえみかぐら訪問介護事業所(以上、南丹市)、木津川市社会福祉協議会ケアセンターハッピーコスモス(木津川市)、大山崎町社会福祉協議会(京都府大山崎町)、京丹波町社会福祉協議会ヘルパーセンターほほえみ(京丹波町)、北星会与謝の園訪問介護事業所、与謝野町社会福祉協議会介護事業所、丹後福祉応援団訪問介護事業所(以上、与謝野町)、近江八幡市社会福祉協議会ヘルパーステーションあづち(近江八幡市)、栗東市社会福祉協議会訪問介護事業所(栗東市)、甲賀市社会福祉協議会ヘルパーステーションこうか(甲賀市)、日野町社会福祉協議会ホームヘルパーステーションひだまり(滋賀県日野町)

高齢者へプレゼント

(2026年3月9日付 京都新聞朝刊)

京都新聞社会福祉事業団は、「高齢者へのプレゼント事業」として京都府、滋賀県内の特別養護老人ホーム7施設に介助用車いすを各1台贈呈した＝写真。2008年度から毎年実施し、贈呈数は306台となった。

企業や団体からの本紙「記念日おめでとうコーナー」や高齢者事業協賛寄付金などを原資にしている。

車いすは、背もたれと座面角度が調整できるティルト・リクライニング介助型と、ひじ置きと脚部が動かせる多機能介助型の2種類から選択。

前者を選択したこぶしの里サテライト今宮（京都市北区）では、試乗した佐原隆さん（89）が「新しい車いすの乗り心地は最高」と感想を述べ、施設長の服部裕美さん（47）は「気持ち前向きになれて、趣味の短歌や俳句に励まれています」と話した。

高齢者へのプレゼント事業

介助用車いすを贈呈



他の贈呈先は次の通り。洛西（西京区）、京都指月あさがおの郷（伏見区）、京都八勝館（八幡市）、真野しょうぶ苑（大津市）、第二邂逅の郷（彦根市）、治田の里（栗東市）

他の贈呈先は次の通り。

洛西（西京区）、京都指月あさがおの郷（伏見区）、京都八勝館（八幡市）、真野しょうぶ苑（大津市）、第二邂逅の郷（彦根市）、治田の里（栗東市）



利用者を楽しませたバイオリンとファゴットの奏者2人による演奏会（守山市十二里町、もりやま作業所）



京都フィルのメンバー2人

作業所で演奏妙技 守山

京都フィルハーモニー室内合奏団のメンバール・デュオ演奏会「でけ公演」が、守山市十二里町のもりやま作業所で行われた。バイオリンとファゴットの森本真裕美さんとフアゴットの田中裕美子さんが出演した。モーリアルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」やバッハの「G線上のアリア」をはじめ、唱歌や歌謡曲のメドレーを披露した。楽器の紹介もあり、参加者はじつくりと聴いた。（日下田貴政）

京都新聞おでかけ公演

(2026年3月6日付 京都新聞朝刊)



◆子どもたちのための事業

子どもたちの健全な成長と明るい未来を支えるため、当事業団では多彩な活動を展開しています。児童養護施設へのレクリエーション支援や卒業お祝い金の贈呈、交通遺児への支援、親子で楽しめる子どもシアターの開催など、子どもたち一人ひとりの笑顔と希望を育む取り組みを行っています。これらの活動を通じて、子どもたちが安心して学び、遊び、成長できる環境づくりに努めています。

◇助成事業

「児童養護施設の子どもたちのレクリエーション」助成（9月～翌年3月）.....12頁

京都・滋賀の全児童養護施設に対し、レクリエーション活動を助成

「児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（3月）.....13頁

中学・高校の卒業とともに京滋の児童養護施設を巣立つ子どもたちに「卒業祝い金」を贈呈

「交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（3月）.....13頁

交通遺児で小学校・中学・高校を卒業する子どもたちに「卒業祝い」として図書カードを贈呈

◇催 事

「京都新聞お楽しみ子どもシアター in 京都/in 滋賀」（8月）.....13頁

京都・滋賀で人形劇などの公演を開催し、子どもたちを招待

児童養護施設レクリエーション（2026年4月20日付 京都新聞朝刊）

「かいゆうかんにいきました。かんらん車にのりました。こわかったけど楽しかった」

2025年度「児童養護施設レクリエーション」に参加した子どもたちから感謝の気持ちのこもった寄せ書きが届いた＝写真。

同事業は、京都新聞社会福祉事業団が京都、滋賀の全17児童養護施設で暮らす子どもを対象に1人2700円と引率費用1施設2万円を助成し、25年度は570人の子どもたちが参加した。

舞鶴学園（舞鶴市）でともに暮らす小中高生らが、1泊2日で大阪を訪れ、水族館や大観覧車、温泉などを楽しんだという。引率した職員は「大阪では『山がない』『ビルがい

子どもたちが笑顔に

児童養護施設レク助成



っぱい」と目をきらきらさせる子どもたちの笑顔を見ることができ、思い出に残る楽しい旅行ができました」と語った。

助成は、京都ゴルフ倶楽部（京都市北区）と同事業団の共催で開催した児童養護施設の子どもたちのための「チャリティーゴルフ大会」での参加者や企業からの善意を主に、個人からの寄付金を活用している。

事業団
だより

児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金
交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金
(2026年3月17日付 京都新聞朝刊)

卒業おめでとう 施設集立つ52人に祝い金

卒業シーズンを迎え、京都新聞社会福祉事業団は、京都府、滋賀県内の16の児童養護施設を集立つ中学生2人、高校生50人に「卒業お祝い金」として総額204万円を贈った。

お祝い金は「児童養護施設の子どもたちのために」と寄せられた善意をもとに、中学生に1人2万円、高校生に同4万円を贈呈している。高校生5人が卒業する京都市東山区の平安養育院（水野



正美施設長）では、同事業団の白石真古人常務理事が「大切に役立ててください」と代表生徒に手渡した＝写真。

卒業生は「好きな英語を生かし、客室乗務員（C

A）を目指している。大学では留学も考えており、そのためバイトも頑張ります」と夢を語った。

また、小中高校を卒業する京都、滋賀の交通遺児に「卒業お祝い」として、図書カードを小学生5人（1人5千円分）、中学生8人（同7千円分）、高校生8人（同1万円分）の計21人に京都府や京都市、おりづる会（滋賀県）を通じて贈った。交通遺児のために寄せられた寄付を活用している。



京都新聞お楽しみ子どもシアター

こどもミュージックアドベンチャー

(2025年8月25日付 京都新聞朝刊)



会場とパフォーマンスで盛り上がったコンサート
(守山市三宅町・守山市民ホール)

音楽と舞踊、朗読のた。無料招待された京
催し「こどもミュージックアドベンチャー」
が24日、守山市の守山市民ホールで開かれ
ひとときを過ごした。

音楽や踊り、朗読楽しむ
守山で催し 京滋の子どもら招待



朗読とマリンバ演奏による音楽物語
「かいじゅうのすむしま」

京都新聞社会福祉事業団と守山市文化体育振興事業団の共催。打楽器・マリンバ奏者の宮本要子さんと、打楽器奏者やダンサー、朗読の「仲間たち」が舞台で演奏と踊りを繰り
後半は、絵本作家谷口智則さん原作の音楽物語「かいじゅうのすむしま」を上演。スクリーンに映し出された絵本とともに、朗読とマリンバ演奏が繰り広げられ、子どもたちは

広げた。さらに、会場と一体となって打楽器とダンスのパフォーマンスをつくり上げ、盛り上がった。

物語の世界に引き込まれていた。

(岩本敏朗)



◆子育て応援事業

子どもたちの健やかな成長と、子育て中の保護者を支えるため、当事業団では二つの助成事業を実施しています。

◇助成事業

「子育て仲間を応援」助成（7月）..... 15頁

子育て中の保護者が交流し支え合うサークルや支援グループを対象に、1団体2万円を助成。2025年度は74団体に総額148万円を贈呈しました。2005年度に開始して以来、情報交換や交流の場を支援しており、少人数グループにも助成する独自の制度として好評を得ています。

「子育て事業助成」助成（7月）..... 15頁

京都・滋賀で子育て支援を行う非営利団体を対象に、講演会や学習会、イベントなどの事業に対し、1団体あたり15万円を上限に助成。2025年度は23団体から応募があり、子ども向けキャンプや文化体験事業、親子で楽しむミュージカル、お話会や音楽会、映画上映会、人形劇など、計13事業に83万8000円を助成しました。



子育て仲間を応援助成・子育て事業助成

(2026年5月12日付 京都新聞朝刊)

ともに生きる

書・杉田昭樹

◆ 子育て応援事業 ◆

京都新聞社会福祉事業団は、京都府、滋賀県で工夫を凝らして子育て活動に取り組む団体に助成する「子育て仲間を応援」を、催しや行事などを支援する「子育て事業助成」を毎年行っている。2025年度はこんな活動を支援した。

「事業助成」を受けた木津川市のグループ「子育てママのつながるBOSAI」は昨年8月、同市の「いずみホール」で、「本気の救命救急ワークショップ」と題したユニークな取り組みを行った。

「もしもの時に迷わず動ける知識を親子で楽しく学ぼう」というのが目的で、市内の小学生の親子ら50人以上が参加した。

当日は事前に募集した小学生から高校生までのボランティア11人も協力。元消防士の講師にAEDの使い方を総動員を請われてはる。



毛布で応急の担架を作り力を合わせて人を運ぶ体験なども行った(昨年8月、木津川市)＝提供写真

救命救急本気で楽しく 生の音楽を乳幼児に…

もらったり、実際に近い形で人形を使った胸部を圧迫する心肺蘇生なども体験した。毛布で応急の担架を作ったり力を合わせて人を運ぶ体験や、視界不良な暗闇での避難誘導体験などもあり、その場で出会った人とも協働が必要にどう協力できるかを取り組んだ。団体代表で防災士の川崎あきさん(49)は「救命に関する体験イベントは少ないので、説明だけでも、とにかく楽しく体験してもらおう」と考えている。

同じく「事業助成」を受けた京都市の「子育て支援グループ」は、な・はなは昨年9月に「20周年記念ありがとう おやこコンサート」を開催し、おやこといっしょに「をん太」を歌った。会場は、滋賀県出身の音楽家グループ「おとのかげはし」がボーカル、ピアノ、パーカッションなどの演奏を披露。乳幼児から小学生の観

充実した活動を支援 今年度分の申請は29日まで

子ら180人ほどが訪れ、本格的な演奏と歌を楽しんだ。

代表の白井けい子さん(77)は「幼いころから生の音楽に親しむのは子どもの感性を豊かにするために大事だと想う。クラシックを中心とした音楽会は乳幼児はほとんど入場できない。今回は助成金を得て、子どもは無料、大人は格安の料金で赤ちゃんから参加できるコンサートを開催でき、生の音楽に触れてもらい、好評だった」と話している。

京都市南区の「空き家バンク京都子ども食堂」は7月、下京区の梅小路公園で、子どもも参加するファッションショーなどの「3周年感謝祭」を開催。大津市の「遠坂Smile door」子ども食堂は12月に遠坂公民館で、コンサートを交えたクリスマス会を開き、いずれも実施費用の一部に「事業助成」を充てた。

大津市で親子で創作体験や自然観察活動を行った「木戸小学校おやじの会」や、京都市西京区で手作り給食の「子ども食堂」や公園などで遊びやゲームを楽しむ活動を続けている団体「オーブンスベイス」の風「などには「仲間を応援」助成を行った。

25年度は「仲間を応援」(一律2万円)で74団体(京都市内15、府内30、滋賀県内29)に総額148万円の、「事業助成」(上限15万円)で計13事業(市内4、府内4、県内5)に総額3万8000円を助成した。26年度分の申請は29日まで受け付けている。



◆福祉活動支援事業

地域福祉の充実を図るため、当事業団では多様な福祉活動を支援しています。

「京都新聞福祉活動支援」助成（2～3月）.....17頁

京都・滋賀の福祉施設や団体を対象に、「運営支援」と「設備支援」の2部門で助成を行い、地域福祉の向上を目指します。支援対象は、障害のある人、高齢者、子ども、難病患者、生活困窮者の支援に取り組む団体など幅広く、1団体あたり30万円を上限に助成します。選考委員会では、地域福祉への貢献度、事業の推進力、期待される成果などを基準に審査し、助成先を決定します。

2025年度は、京都の企業から「高齢者のために役立ててほしい」と300万円の寄付を受け、高齢者支援団体や当事者団体3団体に各100万円を贈呈する特別枠を設けました。これにより、当初の助成額400万円と合わせ、総額700万円の助成を実施しました。

（※2025年度から、助成予算総額を400万円に、1団体あたりの上限助成額を30万円にしています）

京都新聞オーシャン号贈呈事業 贈呈式

2025年9月10日付 京都新聞朝刊



福祉車両8台 京滋8団体に贈呈

京都新聞社福事業団 貿易商社会長寄付基に



オーシャン貿易の米田会長（右から2人目）からの寄付を受け、社会福祉法人などに寄贈された福祉車両。京都市南区・京都日産自動車南店

京都新聞社会福祉事業団（京都市中京区）は9日、貿易商社オーシャン貿易（同区）の米田多智夫会長から受けた寄付を基に購入した福祉車両8台の贈呈式を、京都日産自動車南店（南区）で行った。就労支援事業所や児童福祉施設などで、利用者の送迎などに役立てられる。

米田会長は昨年、地

域福祉や若者支援に役立ててほしいと個人で5千万円を寄付した。同事業団は基金を創設し、3千万円で8台の車両を購入。オーシャン号と名付け、選考を経て、障害者や高齢者、児童の支援に取り組む京都と滋賀の計8団体への寄贈を決めた。

贈呈式で米田会長は「地域の皆さんの生活のお役にたてれば幸いです」と願いを語った。寄贈を受けた団体の代表者たちは「通所者の自宅送迎に役立てたい」「仲間たちに出かける楽しさを味わってもらいたい」と喜んでいた。

以前に寄付を受けた1台を含めオーシャン号は計9台となった。寄付の残りの2千万円は同事業団の給付型の奨学金事業に活用する。（近藤大介）



地域福祉活動に役立てて 助成金贈る

京都新聞福祉事業団は、京都、滋賀両府県の福祉施設やボランティアグループなどの活動を支援する2025年度「京都新聞福祉活動支援」事業の贈呈式をこのほど、京都市中京区のハートピア京都で行った。写真。

京滋28団体に700万円

者の支援団体や当事者団体を対象に100万円を3団体に助成する特別枠で申請を受け付けた。運営13団体（申請22団体）に計182万円、設備12団体（同14団体）に計218万円、特別枠3団体（同3団体）に計300万円、計28団体に総額700万円を助成。高齢者や難病患者、子どものための支援

団体や障害のある人のために活動するボランティアグループの活動費、子ども食堂や障害者施設の設備品の購入などに支援した。

助成団体は、次の通り。

【特別枠】

京都ケアラーネット（京都市北区）、認知症の人と家族の会（上京区）、ハンド&ネイルケアボランティアチームカンチー（左京区）

【運営部門】

自閉症eサービス@京都・滋賀（京

都市上京区）、つるかめ笑顔クラブ

（同）、京都府網膜色素変性症協会

（中京区）、お客様がいらっしやいました・（下京区）、京都障害福祉

デジタル化推進協会（左京区）、助けあいグループりぼん（東山区）、

京都YMCA長岡こおろぎ（西京区）、ジョイント西京視覚障害者ボ

ランティア（同）、京よりそい（宇治市）、『くらしの応援隊』ボラン

ティアの会（長岡京市）、おうさか

高齢者フレイルケアの会（大津市）、

異才ネットワーク（同）、元気つず

ミイオ放課後等デイサービスげんき

（草津市）

【設備部門】

西陣工房（京都市北区）、障害者芸術推進研究機構（同）、京都犯罪被害者支援センター（上京区）、チャ

イルドライン京都（山科区）、洛西寮朗読ボランティアサークル（西京区）、ありがとう（伏見区）、あま

つことも食堂（同）、チエリー工房

（城陽市）、向日市点訳サークル「き

つつき」（向日市）、バスハウス（長岡京市）、滋賀県母子福祉のぞみ会

（大津市）、あじっこ（米原市）

7

顕彰



◆京都新聞福祉賞・福祉奨励賞

(贈呈式1月) 18～19頁

京都府および滋賀県において、地域福祉の向上に著しい功績のあった個人または団体を対象に「京都新聞福祉賞」を、また、活動歴10年未満の若い団体等で、今後の活躍が期待される個人または団体を対象に「京都新聞福祉奨励賞」を贈り、顕彰しています。

本事業は、1965年の事業団設立と同時に「京都新聞社会福祉功労者表彰」として開始し、今年で61年目を迎えます。2024年度に迎えた設立60周年を機に、京都新聞との連名主催とし、京都新聞グループ全体で支える体制へと発展させ、実施しております。

贈呈額は、福祉賞が個人20万円、団体30万円、奨励賞は個人・団体ともに10万円です。推薦は新聞紙面等を通じて公募し、選考委員会において決定します。これまでに個人192件、団体78件、計270件（2025年度時点）を表彰してきました。

2025年度は、福祉賞2団体・福祉奨励賞2団体に贈呈をしました。



京都新聞福祉賞・京都新聞福祉奨励賞 贈呈式

(2026年1月27日付 京都新聞朝刊)

「新たなつながりで前を」

京都新聞福祉・奨励賞贈呈式

社会福祉の向上に貢献した団体や個人を表彰する「京都新聞福祉賞」と、将来のリーダーとして期待される若い世代に贈る「京都新聞福祉奨励賞」の贈呈式が26日、京都市中京区のハートピア京都であつた。福祉賞2団体、奨励賞2団体の功績をたたえた。

京都新聞と京都新聞社会福祉事業団が毎年



京都新聞福祉賞の表彰を受ける全国心臓病の子どもを守る会京都支部の石神支部長(左)＝京都市中京区・ハートピア京都 撮影・三木千絵

実施し、61年目。

今年の福祉賞は、心臓病の子を持つ親が交流する「全国心臓病の子どもを守る会京都支部」(上京区)と、摂食障害を抱える人の自助グループ「あかりプロジェクト関西」(舞鶴市)が選ばれた。

福祉奨励賞は、京都大生らで続ける子ども食堂「からふる」(左京区)、働く大人を小学生が取材し「子ども新聞」を発行する「i note + P」(伏見区)に贈られた。

式では、同事業団理事長の大西祐貴・京都新聞社長が「当事者に寄り添い、安心と希望を与えた」とたたえ、賞状を手渡した。

受賞スピーチで、全国心臓病の子どもを守る会の石神彩乃支部長(51)は「リアルな人間関係を敬遠する風潮で、つながりを求めても一歩を踏み出せない人がいる。心強く温かな場所があると知って新たにつながり、前を向く人が増えていくと信じている」と述べた。(田中恒輝)



公益財団法人 京都新聞社会福祉事業団

京都市中京区烏丸通二条上ル蒔絵屋町260

京都新聞トラストビル 4階

TEL 075 (241) 6186 / FAX 075 (222) 2515



ホームページ
が新しくなりました



X公式アカウントを
フォローしよう



電子決済による
寄付受付をはじめました